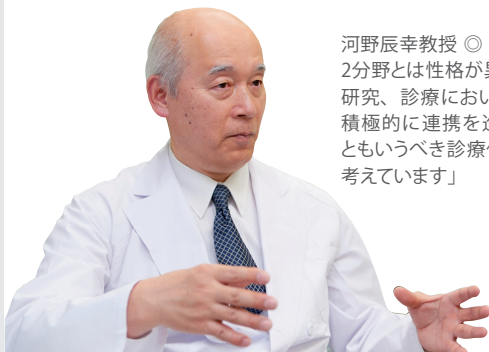


医学部附属病院

消化器・一般外科

新しい診療体制の確立を目指して



河野辰幸教授 ◎「総合外科学分野はほかの2分野とは性格が異なります。しかし、教育、研究、診療においてリンクする部分が多く、積極的に連携を進め、TMDUスタンダードともいべき診療体制を確立していきたいと考えています」



東京医科歯科大学医学部附属病院では、2015年4月から、消化器・一般外科の3分野(食道・一般外科学、腫瘍外科学、肝胆膵・総合外科学)を再編し、教育・研究・診療における連携を強めた新体制を構築する。

「新体制は枠組みを変えるだけでなく、主に腹部臓器を担当する消化管、肝胆膵外科と全身を対象とする総合外科というように、3分野それぞれの担当部門を明確にしました。その上で消化器・一般外科部門として、3分野が一体となって医療の質を高めていきます」と、部門長の河野辰幸教授は再編の狙いを話す。

消化管外科学と肝胆膵外科学は、食道、胃、大腸・肛門、肝胆膵という臓器別の診療科に分け、診療の効率性を高める。抗がん剤や分子標的薬などを取り入れた先進的な外科的がん治療を担う腫瘍化学療法外科を新設し、乳腺外科や消化管外科、肝胆膵外科とも連携しながら診療にあたる。また、これまで関連病院に依存していた小児外科を再開することで、小児周産期医療の発展につなげる。末梢血管外科が消化管・一般外科の一部門であることも明確にした。

再編の背景には、診療領域と分野のミスマッチや、関連病院との人材

交流のしにくさなどの問題があった。

「医療の細分化が進んだことから、今の研修制度では早期に専門特化しがちですが、それにより外科学全体を網羅的に学ぶ機会が減ってしまったという弊害があります。新しい枠組みは、このような課題にも対応し、3分野全体で幅広い外科学をカバーします。また、関連病院との人材交流についても全体で共有できるので、分野単位の旧医局制より進めやすくなるはずです」

外科内での縦割りの枠組みを超える取り組みは、外科志望者増加にもつながると期待を寄せている。 **B**